

新入生オリエンテーションに対する学生による評価の分析

著者名(日)	古田 雅明, 中村 紘子, 香月 菜々子[他]
雑誌名	人間関係学研究 : 社会学社会心理学人間福祉学 : 大妻女子大学人間関係学部紀要
巻	14
ページ	59-70
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005690/

新入生オリエンテーションに対する学生による評価の分析

An Analysis of the Student's Evaluation of Freshman Orientation.

古田 雅明^{*}, 中村 紘子^{**}, 香月 菜々子^{*}, 加藤 美智子^{*}, 田中 優^{*},
西河 正行^{*}, 福島 哲夫^{*}, 堀 洋元^{*}, 向井 敦子^{*}, 八城 薫^{*}

Masaaki FURUTA, Hiroko NAKAMURA, Nanako KATSUKI, Michiko KATO, Masashi TANAKA,
Masayuki NISHIKAWA, Tetsuo FUKUSHIMA, Hiromoto HORI, Atsuko MUKAI, and Kaoru YASHIRO

<キーワード>

新入生オリエンテーション, 学生評価, テキストマイニング

<要 約>

本研究では、近年の学生の特性にあわせた新入生オリエンテーションのプログラムを検討する目的で、ターニングポイントとなった2010年度と、直前の2009年度、直後の2011年度のプログラムに対する学生による自由記述の評価について、テキストマイニングによる分析を行った。調査対象者292名のうち、278名（回収率95.2%）から得られたプログラムの良かった点の自由記述278文と悪かった点の278文の計556文を分析対象とした。

3年間にわたる学生による評価の分析から、プログラムの内容に関わらず一貫して新入生が肯定的に評価することは、学生同士が知り合いになれることであった。一方で、学生同士の自発的交流に重点をおいた時間配分や教員・院生による学習面の適応を支援する教務関連の座学のプログラムに対する否定的な評価が示された。最後に教員が親しみやすい存在として人となり積極的に学生に示し、直接的に学生同士の交流に関与するプログラム、すなわち対人交流面での適応を促進する内容が、新入生の円滑な大学適応へと繋げるために重要であることが考察された。

^{*}大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻

^{**}名古屋大学大学院 環境学研究科

1. 問題と目的

(1) 問題

大学進学率の上昇に伴う学生の多様化の一方で、卒業時の質保証が求められるなど、近年、我が国の大学を取り巻く環境は大きく変化しつつある。この変化を背景に、新入生を大学教育へといかに円滑に移行させていくか、といった学習面の適応のみならず、大学生活へといかに馴染ませていくかといった社会的な適応も含めて、初年次教育への期待が高まっている¹⁾。

日本より早い段階で上述の変化を体験したアメリカでは、1970年代後半から多くの高等教育機関において初年次教育が導入されている。例えば初年次の基礎セミナーなどのプログラムが、学生の高等教育への移行や適応だけでなく、次の学年への進級率の向上や退学率抑制に対して効果があるとの知見が蓄積されてきた^{2), 3), 4), 5)}。そして、日本においても2000年頃より、初年次教育が導入されるようになり、具体的なプログラムとして多くの大学において、1. 新入生オリエンテーション、2. 教養セミナー等の取り組み（本専攻では社会・臨床心理学基礎セミナー）、3. 支援環境の充実（学生相談室の設置や学生の居場所づくりとしての施設の整備等）といった取り組みが行われている⁶⁾。

これら初年次教育の中でも、とりわけ大学教育初動時にあたる新入生オリエンテーションのあり方が注目されている^{7), 8)}。新入生オリエンテーションプログラムは、いわば学内の各学部・専攻の教職員が新入生と出会う最初の機会であり、学生に対して各専攻の教育の方向性を伝える重要な場となっている。そのため、プログラムの内容は各大学の個性や伝統、建学の精神を活かしつつ、新入生の特性にあわせて、オーダーメイドのプログラムを展開する必要がある^{6), 9)}。その一方で、研究面では、個々の大学の実践に関する報告は多いものの、新入生オリエンテーションに関する効果に言及しているものは少ない。また、効果に言及していても単年度のプログラムに対する評価が中心であり^{10), 11), 12)}、複数年に渡って継続的に新入生

オリエンテーションの効果を検討しながら、毎年プログラムの再構築を行っている大学は筆者らが探した範囲ではわずか一校に過ぎなかった^{13), 14), 15), 16), 17), 18)}。

我々社会・臨床心理学専攻（以下、本専攻と略す）では、少人数制のグループ学習を中心とした積み上げ型カリキュラムによる心理学教育を行っており、基幹科目は全て専任教員によるチームティーチング体制を取っている。そのため学部開設以来10年以上にわたりグループ学習への移行を主目的とする宿泊型オリエンテーションを入学直後に実施してきた。しかしここ数年、学生同士の自発的交流を負担に感じる者が増えてきたことや、学生がどのグループに割り当てられるかによって学生の満足度に大きな差が生じるといった問題が生じたため、学生の自発的交流と教務ガイダンスを中心とした内容から、教員と学生の交流および学生間の交流を促進するためのグループレクリエーション活動を中心とした内容へと、プログラムを抜本的に見直した。そこで本研究では、ターニングポイントとなった2010年度と、直前の2009年度、直後の2011年度のプログラムに対する学生による評価について、テキストマイニングによる分析を行い、近年の学生の特性にあわせたプログラムを検討したい。

なお、今回の研究は佐久田ら（2003）が指摘する通り、本専攻独自のオリエンテーションを体験した学生を調査対象としているので、いわばケース研究的な意味合いが強い¹³⁾。したがって、まずはこれまでの本専攻における新入生オリエンテーションプログラムの内容を具体的に提示する必要がある（資料1参照）。

(2) 社会・臨床心理学専攻におけるオリエンテーションプログラム

1) 準備段階

本学では新入生オリエンテーションを入学式直後の4月初旬に行っているが、本専攻では、その準備を半年前の宿泊施設の選定からスタートしてきた。プログラムは、1年担任の専任教員2名が中心となり、数か月前からドラフトを作成し、数回の専攻会議の検討を通して合議により決定し

た。そしてオリエンテーション直前の1カ月は、1年担任教員と助手による準備会議が頻回に行われる。新入生オリエンテーションに参加する大学側スタッフは、専任教員8名から9名、助手2名、大学院生3名から14名（院生スタッフ数は年度によって異なる）であった。

2) 新入生オリエンテーションプログラム

(a) 2009年度までのプログラム

2009年度まで、本専攻では新入生オリエンテーションを軽井沢や清里などの観光地における1泊2日の宿泊型で行ってきた。実施の目的は、1. 新入生相互の親睦を助けること、2. 教務関係の確認・徹底（時間割作り、履修登録の方法、専攻カリキュラムの説明など）、3. 大学生活の過ごし方の案内（大学院生による説明）、4. 教職員との交流（各科目担当の専任教員および助手の紹介）であった。宿泊型とするのは、これらの目的の中でも教務関係を説明する時間を十分に確保し、教員や大学院生が補助を行うことで一人ひとりの学生の理解を徹底させるためであった。というのも、当初はオリエンテーションの後に新入生が書類による履修登録をする日程になっていたの、プログラムの中に教務関係の実務を行う必要があったからである。なお、2009年度は履修登録後にオリエンテーションを行う日程となっていたので履修登録の説明ではなく、専攻のコアカリキュラムや大学での学び方などの説明を中心に行った。

さらに、宿泊型の利点を活かし、できるだけ学生相互がふれあう時間を確保するため、約90名の新入生を10人程度のグループに分け、グループ単位で宿泊、移動をさせてきた。観光地での実施のため移動に時間はかかるが、行きのバスの中で、担任教員の紹介や学生の自己紹介などをゲームも交えながら行うなどの工夫を行ってきた。つまり、2009年度までの新入生オリエンテーションでは、学生の学習適応については教員が中心にサポートし、大学生活への移行は大学院生の情報提供によるサポートを行い、さらに学生間の交流は、時間と場所を確保することで新入生の自発的

な交流に任せてきたと言える。そして、オリエンテーション終了直後の授業時間において学生へのアンケート調査を行い、次年度のプログラムに学生の意見を反映させてきた。

専攻開設以来、ほぼ10年間にわたって上記のオリエンテーションを行ない、新入生の学習面の適応や、大学生活への円滑な移行を概ね達成してきたが、2009年前後から長引く不況や学生の多様化の影響を受け、アンケートには従来にはなかった問題点が挙げられるようになった。それらは、主に費用の高さへの不満であったり、自発的な交流の時間を有効に使い切れない学生がおり、オリエンテーションへの参加を負担に感じる者が増えてきたこと、あるいはグループ間の格差があり、グループによっては参加学生の満足度が低くなることなどであった。

(b) 2010年度のプログラム

そこで、2010年度からプログラムを抜本的に見直し次のことを行った。1. 費用を抑えるために旅行業者に頼まず、できるだけ教職員が準備を行うこととした。具体的には、旅行ガイドの仕事を助手が行い、これまで助手が対応してきた業務を教員が分担した。2. 教務関係ガイダンスに充てていた時間を、学生が楽しみながら交流できるオリエンターリングに変更した。オリエンターリングでは教員が各ポイントに立ち、課題を提示して新入生がグループで回答する形式とした。最後にグループ単位でオブジェを作成させ、オリエンターリングの各ポイントの合計得点でグループを表彰するなど遊びの要素を増やした。さらに3. 大学院生による大学生活の過ごし方の案内を簡略化し、教員紹介に力点を移した。しかも、専門領域や担当授業の紹介というよりは、趣味や大学生時代のエピソードなど、教員の人となりを伝えることに力点を移した。4. 学生と教員とが直接交流する時間を拡大した。具体的には、昼食をグループで取るようにし、専任教員を各グループに割り振り、話し合いの場を作った。さらに、1日目の夜2時間を教員との談話の時間とし、加えて夜の点呼を教員が行い、各コテージにおやつ

の差し入れを行った。以上のように学習適応だけでなく、大学生活への移行や学生交流においても教員が深く関与するようにと、抜本的な見直しを行なった。

(c) 2011年度のプログラム

2011年度は前年度の方針を引き継ぎ、さらなる費用の削減を目指して、大学近隣の高尾での宿泊を予定していた。しかしながら、3月11日の大震災により、急遽宿泊を中止とせざるを得なくなり、学内で1日だけの実施に変更した。プログラムも3分の1程度に大幅に内容を削減したが、2010年度の基本方針を踏襲して学生相互の親睦を図ることに重点を置き、教員紹介を工夫し、教員と新入生が交流する時間は確保した。また、学内実施の利点を生かし大学の施設を利用したオリエンテーリングを実施した。しかしながら、急遽、履修登録上の問題が発生したため、オリエンテーション実施前の1時間を履修ガイダンスに変更した。2時間のオリエンテーリングでは、各ポイントに教員と院生が立ち、心理学を題材としたクイズ（心理学史、投影法、重さの弁別など）やゲームなどを行わせ、グループで回答するようにさせ、総合得点の高いグループを表彰した。

(3) 目的

本研究では、ターニングポイントとなった2010年度と直前の2009年度、直後の2011年度のプログラムに対する学生による評価について、テキストマイニングによる分析を行い、近年の学生の特性にあわせたプログラムを検討する。

2. 方法

調査対象者と手続き：調査対象者は、社会・臨床心理学専攻の2009～2011年度の新入生292名（2009年度入学者109名、2010年度入学者90名、2011年度入学者93名）であった。調査は各年度の新入生を対象に、オリエンテーション実施直後の授業時間（2009年4月15日、2010年4月15日、2011年4月13日）を用いて行われた。

質問紙の構成：各年度の質問紙の構成は以下のとおりである：

2009年度質問紙構成：2009年度の質問紙は無記名式であり、オリエンテーション旅行に関する6つの設問から構成されていた。設問1ではカリキュラムや授業の受け方等について理解できたかを、「分かった」から「分からなかった」の4件法で尋ねた。設問2～3では、大学院生による大学生活や進路の説明、レクリエーションの内容が有意義だったかを「有意義だった」から「有意義ではなかった」の5件法で尋ね、その理由についての自由記述を求めた。設問4では学生同士の交流を深めることができたかを「深めることができた」から「深まらなかった」の5件法で尋ねた。設問5では、オリエンテーション旅行の良かった点と改善が必要と感じた点について自由記述を求め、設問6では清里の清泉寮でオリエンテーションが実施されたことについての意見を記述するよう求めた。

2010年度質問紙構成：2010年度の質問紙は記名式であり、学籍番号、クラス、氏名、オリエンテーションの班を記入するよう求めた。設問数は2問であり、設問1ではオリエンテーションの良かった点、設問2ではオリエンテーションの悪かった点について、自由に記述するよう求めた。

2011年度質問紙構成：2011年度の質問紙は記名式であり、学籍番号、クラス、氏名、オリエンテーションの班、居住形態の回答を求めた。質問紙はオリエンテーションの感想、大学生活で心配している点などを尋ねる5つの設問から構成され、設問1では、オリエンテーションが役に立ったか、学生同士の交流ができたかなどの10項目の質問について「あてはまる」から「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。設問2～3では、オリエンテーションの良かった点と悪かった点について自由記述を求めた。設問4では、現在心配していることについて、学業や友人関係など12項目から複数回答法で回答を求め、設問5では、現在気

になっていることについて自由記述を求めた。

本研究では、上述の設問のうち、オリエンテーションの良かった点と悪かった点(改善点)に関する自由記述について分析を行った。各年度において分析対象とした設問は、2009年度の「設問5-1: オリエンテーションの良かった点」と「設問5-2: オリエンテーションの改善点」、2010年度の「設問1: オリエンテーションの良かった点」と「設問2: オリエンテーションの悪かった点」、2011年度の「設問2: オリエンテーションの良かった点」と「設問3: オリエンテーションの悪かった点」である。

3. 結果

有効回答数: 調査対象者292名のうち、オリエンテーションに参加しなかった者、授業を欠席した者、回答に著しい不備があった者を除いた278名(95.2%)の回答を分析対象とした。各年度における有効回答数は2009年度が103名(94.5%)、2010年度が84名(93.3%)、2011年度が91名(97.8%)であった。分析対象としたデータは、回答者278名の良かった点の記述278文と悪かった点の記述278文の計556文であった。

分析の概要: オリエンテーションの良かった点、悪かった点の自由記述を日本語の形態素解析ソフト「KH Coder(Ver. 2. beta. 26)」^{19),20)}を用いて分析した。

分析の第1段階として、個々の語をもとに、オリエンテーションに対する評価の全体的特徴を検討した。分析に用いる語を抽出した後、記述の全体的傾向を把握するため、出現頻度の高かった語について、語の共起関係を検討した。

分析の第2段階として、抽出語のコーディングを行い、個々の語ではなく、概念や事柄、カテゴリのレベルから、オリエンテーションに対する評価を検討した。コーディングされた語を含む文の数が、年度、良かった点・悪かった点によってどのように異なるかを集計し、また、各年度における良かった点・悪かった点とコードとの関係を対応分析によって検討した。

抽出語の傾向: 分析に用いた語の品詞はKH Coderの品詞体系における名詞、サ変名詞、形容動詞、固有名詞、組織名、人名、地名、ナイ形容(仕方ない、問題ないなど)、副詞可能(時間、前など)、感動詞、動詞、形容詞、副詞、名詞B(ひらがなのみの語)、動詞B(ひらがなのみの語)、形容詞B(ひらがなのみの語)、副詞B(ひらがなのみの語)、名詞C(漢字1文字の語)であった。また、KH Coderの内蔵辞書に含まれていない「オリエンテーション旅行」、「自由時間」などの複合語を合わせた58語を強制抽出語とした。分析は、文単位で行い、一人の回答者の良かった点(または悪かった点)の回答文に、同じ語が複数回出現しても1語としてカウントした。

分析対象すべての文の総抽出語数は21,049語であり、年度別に見ると2009年度は良かった点1,340語、改善点1,516語、2010年度は良かった点11,937語、悪かった点3,202語、2011年度は良かった点2,047語、悪かった点1,007語が抽出された。総抽出語のうちで重複していない語の種類は2,077語、そのうち分析に用いた語の種類は1,434語であった。

抽出語から、記述の全体的傾向を検討するため、出現数10以上の語144語に基づく語の共起関係(表示語数50語、Jaccard係数.239以上)を示した(図1)。

共起関係の分類は、図1の左上から順に、「仲良く」、「なれる」といった語のグループの①友人関係、②食事、「班」、「する」、「できる」といった語からなる③班行動、「一緒」、「過ごす」という語からなる④交流、⑤自己紹介、⑥時期、「散策」、「山」からなる⑦清里、「学ぶ」、「心理学」という語からなる⑧学習、⑨会話のなさ、「問題」、「考える」という語からなる⑩グループワーク、「体験学習」、「作品」からなる⑪レクリエーションとした。

各年度の特徴: コードに基づく検討 抽出語、共起関係、および研究目的に基づき、31のコードを作成し、コーディングルールに従って抽出語を分類した。表1はコードと、コードが付与された語、および、コードの出現率を示したものである。

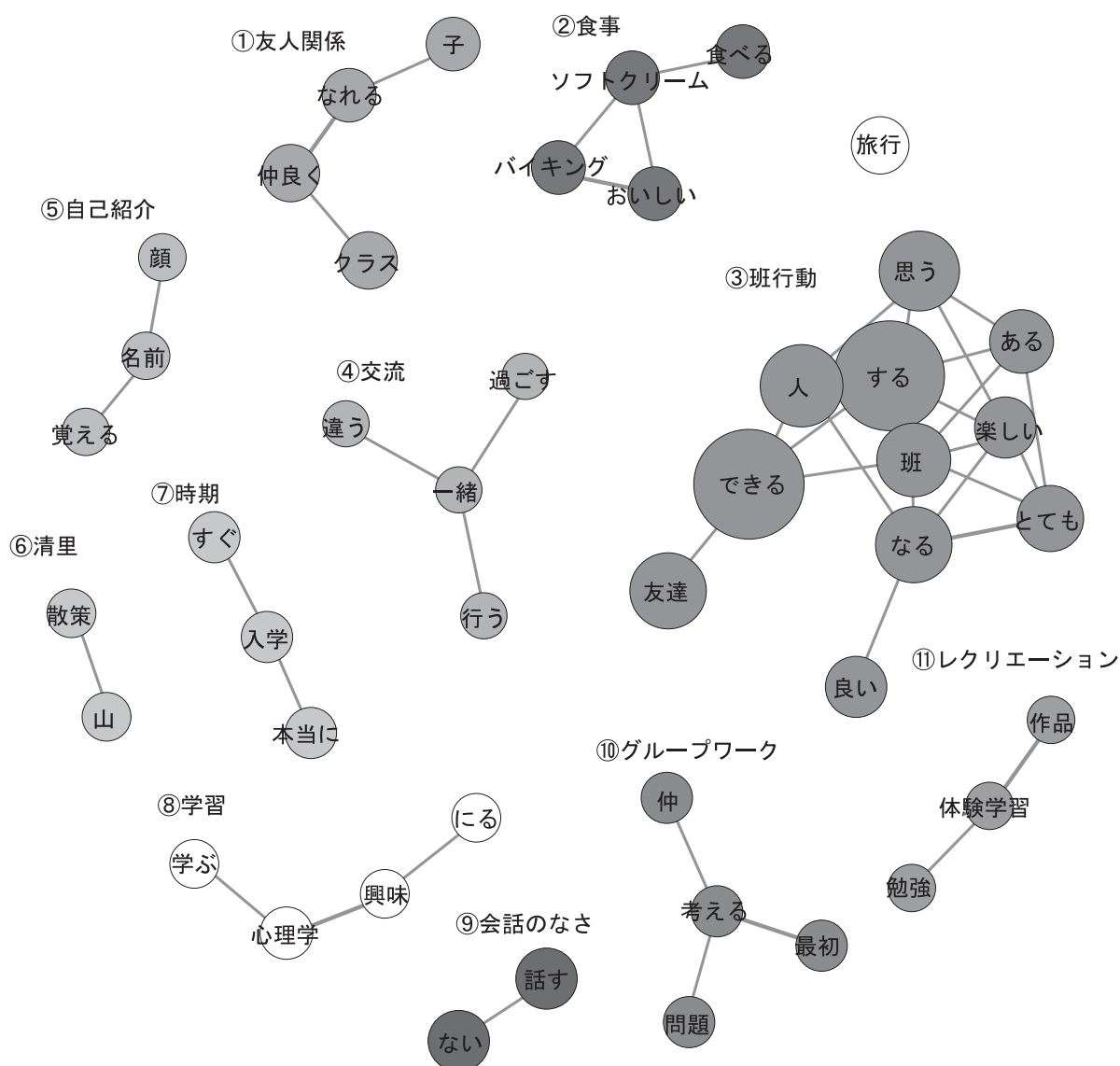


図1 抽出語の共起関係

各年度において、どのコードが言及されやすいかを検討するため、各年度の良かった点・悪かった点それぞれにおけるコードの出現率を求めた。また、コードの出現傾向に年度と良かった点・悪かった点で差があるかを、 χ^2 検定により検討した(表2)。

どの年度においても、良かった点として「友

達」の出現頻度が高かった。分かち書き前の自由記述を参照すると、いずれも“新しい友達ができた”といった内容であった。良かった点として、2009年度と2010年度に共通して出現頻度が高かったコードは「交流」と「慣れる」であり、自由記述は“談話室で先生方や班の人と気軽に交流できた”などであった。2010年度と2011年度で

表1 語のコーディングルールと各コードの出現率

コード	語	出現率(%)	
		良かった点	悪かった点
友達	友人, 友達, 友だち, 友情, 友好, 知り合い, 知人	43.9	2.9
先生	先生, 教員, 先生方, 担任, 教職員	22.7	1.4
院生	先輩, 院生, 大学院生, 大学院, 修士	14.8	3.6
グループ	グループ, 班行動, メンバー, 班員, みんな, 皆, 班, 人たち, 子たち, 人達, 子達, 班行動, 全員, グループ内	30.6	8.6
交流	交流, コミュニケーション, 接する, 仲良く, 出会う, 知り合う, 知り合える, 触れ合える, 触れ合い, ふれあい, ふれあえる, 関わり, 関わる	36.0	9.4
会話	話す, 話せる, しゃべる, 喋る, 話し合う, お話, 会話, 話し合い, 聞く	31.3	6.5
きっかけ	機会, きっかけ, チャンス, 接点	16.2	3.2
新規	初めて, 最初, 一番, はじめて, 新しい, 新た, 新しく, 初対面, 新鮮	25.5	2.2
オリエンテーション	オリエンテーション, オリエンテーション旅行, オリエン	14.7	4.6
ガイダンス	ガイダンス, 教務, 説明	1.4	6.1
心理	心理学, 心理	8.3	1.1
勉強	勉強, 学習, 学ぶ, 学べる, 講義, 授業, 履修, テスト, 試験, 単位, 講習, 研究, 課題	9.0	1.8
レクリエーション	レクリエーション, レク, オリエンテーリング, ゲーム, スタンプラリー, クイズ, ワーク, ビデオ, 散策, 体験学習, アウトレット, 景品	16.2	10.1
自己紹介	自己紹介, 紹介, 名前	11.2	4.7
時間	時間配分, 時間, 予定, スケジュール, 時期, 時間通り, 計画, 進行, 間隔, 期間, 段取り	7.6	24.8
自由時間	自由時間, 談話室, 自由	3.6	2.9
変更	変更, 変わる, 変える	0.4	3.6
楽しい	楽しむ, 楽しめる, 楽しみ, 楽しい, 面白い	24.5	2.2
快適	良い, 快適, 和む, 和らぐ	37.8	8.6
知る	知る, 知れる, 分かる, 理解	24.5	4.3
慣れる	慣れる, なれる, 打ち解ける	18.7	0.4
多い	多い, 長い, すぎる, 混む, たくさん, 沢山	20.9	18.4
少ない	少ない, 短い, 足りない, 早い	4.0	9.4
疲労	疲れる, 疲労, 疲れた, 面倒, 大変	2.5	6.5
不安	不安, 緊張, 心配, 迷う, 憂鬱, 苦手, ダメ, 戸惑う	10.1	4.0
嫌悪	いや, イヤ, 嫌, 辛い, 悪い, 残念, 不快, 不便	1.4	6.8
施設	キャンパス, 学内施設, 学内, 施設, 建物, センター, 図書館, 設備, 教室, 場所	9.7	4.0
宿泊施設	宿泊, コテージ, 部屋, お風呂, 温泉, 足湯, 泊る, 1泊2日, 一泊, 一晚, 一夜, シャワー, 暖房	17.3	13.0
食事	食事, 食堂, 食べる, 夕食, 朝食, 昼食, 弁当, お弁当, バイキング, ソフトクリーム, ごはん, デザート, アイス, アイスcream, クッキー, プリン, 食べ物, お昼ご飯	23.0	10.1
気候	気候, 寒い, 暗い, 暑い, 気温	2.2	10.4
移動	バス, 移動時間, 移動, 遠い	10.4	10.1

表2 各年度の良かった点・悪かった点における、コードの出現率(%)および χ^2 分析結果

		コード															
年度		友達	先生	院生	グループ	交流	会話	きっかけ	新規	オリエンテーション	ガイダンス	心理	勉強	レクリエーション	自己紹介	時間	自由時間
2009年度	良かった点	37.9	1.0	5.8	16.5	32.0	15.5	13.6	1.9	0.0	1.0	0.0	2.9	1.0	4.9	3.9	1.0
(n=103)	悪かった点	1.9	0.0	3.9	12.6	6.8	7.8	3.9	0.0	4.9	11.7	0.0	1.9	5.8	4.9	34.0	1.9
2010年度	良かった点	46.4	45.2	32.1	69.1	53.6	58.3	26.2	51.2	41.7	3.6	23.8	23.8	40.5	20.2	17.9	10.7
(n=84)	悪かった点	4.8	3.6	4.8	20.2	15.5	6.0	3.6	6.0	8.3	1.2	3.6	1.2	11.9	8.3	19.1	7.1
2011年度	良かった点	46.2	23.1	8.8	17.6	24.2	24.2	9.9	28.6	6.6	0.0	3.3	2.2	9.9	9.9	2.2	0.0
(n=91)	悪かった点	2.2	1.1	2.2	9.9	6.6	5.5	2.2	1.1	1.1	4.4	0.0	2.2	12.1	1.1	20.9	1.1
	全体	23.0	11.5	9.2	23.4	22.7	18.9	9.7	13.9	9.7	3.8	4.7	5.4	12.8	7.9	16.4	3.4
	χ^2 二乗値(df=5)	130.1**	145.3**	65.33**	118.6**	81.8**	115.9**	41.2**	160.3**	120.6**	25.0**	84.2**	66.0**	87.6**	26.5**	50.3**	24.3**

		コード															
年度		変更	楽しい	快適	知る	慣れる	多い	少ない	疲労	不安	嫌悪	施設	宿泊施設	食事	気候	移動	
2009年度	良かった点	0.0	6.8	9.7	5.8	18.5	11.7	0.0	0.0	1.0	0.0	1.0	8.7	8.7	1.0	1.0	
(n=103)	悪かった点	6.8	1.9	4.9	0.0	3.9	21.4	5.8	3.9	0.0	2.9	0.0	8.7	11.7	6.8	8.7	
2010年度	良かった点	1.2	56.0	81.0	34.5	35.7	46.4	11.9	7.1	31.0	4.8	15.5	45.2	57.1	22.6	33.3	
(n=84)	悪かった点	1.2	3.6	15.5	9.5	2.4	22.6	11.9	7.1	10.7	17.9	4.8	32.1	14.3	29.8	20.2	
2011年度	良かった点	0.0	15.4	29.7	36.3	3.3	7.7	1.1	1.1	1.1	0.0	14.3	1.1	7.7	0.0	0.0	
(n=91)	悪かった点	2.2	1.1	6.6	4.4	3.3	11.0	11.0	8.8	1.1	2.2	7.7	0.0	5.5	0.0	2.2	
	全体	2.0	13.3	23.2	14.4	11.0	19.6	6.7	4.5	7.0	4.1	6.8	15.1	16.7	9.4	10.3	
	χ^2 二乗値(df=5)	16.8**	166.7**	201.4**	95.4**	81.2**	55.6**	22.2**	14.0*	97.2**	50.8**	31.6**	61.3**	119.1**	86.8**	84.5**	

*p<.05; **p<.01

太字は有意に出現頻度が高かった項目、斜体は有意に出現頻度が低かった項目である

は「先生」、「新規」、「知る」、「施設」の出現頻度が高かった。自由記述は“先生方が楽しくて、授業が楽しみになった”，“友達や先生のことを知った”，“学内オリエンテーリングで大学の施設が良く分かった”といった内容であった。2010年度の良かった点でのみ出現頻度が高かったコードは「院生」、「会話」、「きっかけ」、「オリエンテーション」、「心理」、「勉強」、「レクリエーション」、「自己紹介」、「楽しい」、「快適」、「多い」、「不安」、「食事」であった。自由記述は，“2日目のレクリエーションは、森林浴をしながらポイントごとに心理学的なことをやれてすごく楽しかった”などであった。

一方、悪かった点として出現頻度が高かったコードは、2009年度の「ガイダンス」、「時間」、「変更」であり自由記述は“大学内のガイダンスと重複して無駄”，“予定の変更が急だった。事前に知らせて欲しい”といった内容であった。また2010年度は「嫌悪」であり、自由記述は“バスの席指定がイヤ”，“温泉が寒い”などであった。2011年度は「疲労」であり，“校内を走り回るのが疲れた”，“人との交流を強制されるのが疲れ

た”といった内容であった。良かった点と悪かった点の両方で出現頻度が高かったコードは、2010年度の「自由時間」、「宿泊施設」、「気候」、「移動」であった。自由記述では“自由時間が長くてグループの人と親睦を深められた”，“自由時間が長すぎる”，“コテージが綺麗で良かった”，“コテージが汚い”，などであり、同じ条件でも学生の評価が分かれていた。

対応分析

次に各年度の良かった点・悪かった点の特徴を検討するため、31のコードと各年度の良かった点・悪かった点について対応分析を行い、5つの成分を抽出した。各成分の寄与率は、第1成分から順に、48.3%，21.2%，14.2%，10.6%，5.7%であった。図2は、X軸を第1成分、Y軸を第2成分とし、コードと各年度の良かった点・悪かった点を布置したものである。

第1成分は、正方向に「楽しい」、「友達」、「知る」などのコードと各年度の良かった点が、負方向に「変更」、「ガイダンス」、「時間」、「嫌悪」などのコードと各年度の悪かった点が布置さ

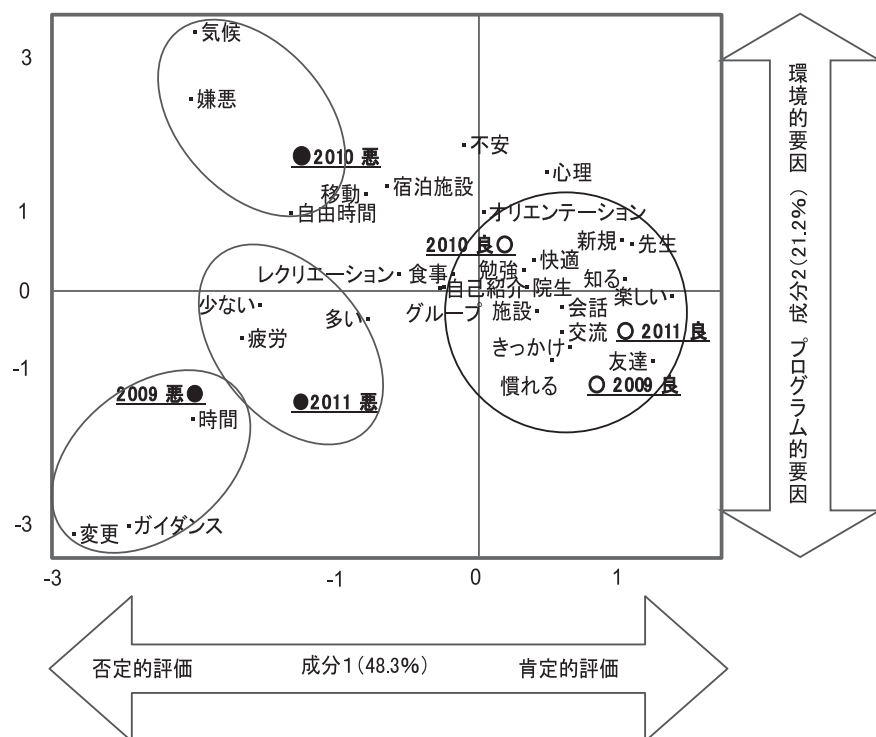


図2 オリエンテーション 各年度の良かった点、悪かった点（対応分析結果）

れていることから、肯定的評価・否定的評価を分ける軸とみなすことができる。第2成分は正方向に「気候」、「嫌悪」、「不安」、「心理」、「宿泊施設」、負方向に「変更」、「ガイダンス」、「時間」といったコードが布置されていることから、環境的要因とプログラムの要因を分ける軸とみなすことができる。

各年度の良かった点・悪かった点とコードの関係を見ていくと、図の第1象限には2010年度の良かった点と「心理」、「新規」、「先生」、「楽しい」、「知る」、「快適」などのコードが布置されており、教員や心理学について知ることができたことが2010年度の良かった点と関わっていた。第2象限には2010年度の悪かった点と「気候」、「嫌悪」、「自由時間」、「宿泊施設」、「移動」などが布置されており、宿泊環境の不便さや寒さが2010年度の否定的な面として挙がっていた。第3象限には2009・2011年度の悪かった点と「少ない」、「多い」、「疲労」、「時間」、「ガイダンス」、「変更」などが布置されており、プログラムの予定変更や時間配分が、これらの年度での問題点として

挙げられていた。

第4象限には2009・2011年度の良かった点として「交流」、「会話」、「きっかけ」、「慣れる」、「友達」などが布置されており、友人と交流し、大学生活に慣れるきっかけが出来たことが、これらの年度の良かった点と関わっていた。また、図の原点付近には「グループ」、「勉強」、「自己紹介」、「食事」、「レクリエーション」といったコードが布置されており、これらの語は各年度の良かった点・悪かった点に共通して挙げられていたと言える。

4. 考察

3年間の学生による評価の分析結果から、新入生オリエンテーションの形式に関わらず、彼女らが一貫して肯定的に評価することは、学生同士が知り合いになれることであったと言える。つまり、観光地への宿泊とするか、あるいは1日のみの学内実施とするかといったオリエンテーションの形式は、この肯定的評価にあまり影響しない

と考えられる。

一方、オリエンテーションの内容面を見ると2009年度の結果は、学生同士の自発的交流に重点をおいた時間配分や教務、教員・院生による学習面の適応を支援する座学のプロプログラムに対する否定的な評価を示している。また、2010、2011年度における「先生」「知る」コードに対する肯定的な評価は、教員が親しみやすい存在として人となりを積極的に学生に示し、直接的に学生同士の交流に関与するプログラム、すなわち対人交流面での適応を促進する内容が、新入生の円滑な大学適応へと繋げるために非常に重要であることを示唆している。女子大学の心理学科の新入生を対象とした先行研究においても、オリエンテーションの形式に関わらず、学生にとっては新入生同士で親密化が達成されたかどうか、が重要であること、また教員との親密化が大学生生活満足度に強く関与していることが示されている^{16), 17)}。本研究でも同様の結果が得られたと言えるだろう。ただし、先行研究では宿泊型をベースにしているが、本研究では1日のみの学内実施であっても、同様の結果が得られることを示している点に先行研究との相違がある。さらに近年の本学の学生の場合、学生同士が親密化するためには、時間と場所を保証して学生の自主性にまかせるよりは、教員が積極的に働き掛ける必要があることが明確となった点が、新たな知見と言えるだろう。

学生の情緒面での適応や大学生活への適応は、学習面での適応よりも学生の退学に対する予測性が高いとの研究³⁾や、オリエンテーションを受けた学生は、受けていない学生に比べてGPAのスコアが高いとの研究もある²¹⁾。今後は、新入生オリエンテーションと学生のその後のGPAを中心とする学業面での成果、あるいは退学も含めた進路等との長期的な関連性についても継続的に検討する必要があるだろう。いずれにしても本学において初年次教育の組織的検討、特に新入生オリエンテーションの効果の検討は緒についたばかりである。本学ならびに本専攻の伝統や特性を活かしつつ、多様な学生の適応をサポートするプログラムの構築が求められている。

付記：本論文は第76回日本心理学会での発表（古田・中村・香月・加藤・田中・西河・福島・堀・向井・八城，2012）²²⁾に加筆修正したものである。本調査にご協力くださった新入生の皆様に記して感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 中央教育審議会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申)
- 2) Bean, J. & Eaton, S, B.(2001).The psychology underlying successful retention practices. *Journal of College Student Retention*, 3(1), 73-89.
- 3) Gerdes, H. & Mallinckrodt, B.(1994). Emotional, social, and academic adjustment of college students: a longitudinal study of retention. *Journal of Counseling & Development*, 72, 281-288.
- 4) Kozeracki, C, A. (2003). The effects of freshman-year programs at community colleges. *Community College. Journal of Research and Practice*, 27, 439.
- 5) 西垣順子 (2007). 学士課程への移行を目的とする初年次学生のための教育に関する考察, 大阪市立大学大学教育, 5(1), 95-103.
- 6) 石倉健二・高島恭子・原田奈津子・山岸利次 (2008). ユニバーサル段階の大学における初年次教育の現状と課題, 長崎国際大学論叢, 8, 167-177.
- 7) 宮原久実・伊藤昇・谷中晃・村田陽一 (2009). 学生参画のリアシュア-Reassure型オリエンテーションプログラムの開発, 大学行政研究, 4, 65-78.
- 8) セーラ・ルイーザ・バーチュリ・大村恵子・鈴木義也・澁谷智久 (2010). 新入生オリエンテーションの展開 一包括的プログラムの構築の試み一, 東洋学園大学紀要, 18, 221-246.
- 9) 栗田充治 (2001). 学生と創る新入生オリエンテーション, 大学と学生, 440, 27-32.
- 10) 林彩子・宮本知弘 (2011). フレッシュマンキャンプと大学生生活適応に関する研究, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 8, 93-99.

- 11) 黒澤毅 (2006). 新入生オリエンテーションキャンプの効果, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 3, 59-68.
- 12) 望月肇・藤井清治・猪川優子・山尾徳雄・濱中俊一・勘久保広一・ダワァガンバット・長井弘志・葛目幸一・野々山和宏・中村真澄・若松純子・阿部智美 (2010). 2009年度新入生オリエンテーション合宿の実践ー高専における初年次教育の一環としてー, 弓削商船高等専門学校紀要, 32, 129-136.
- 13) 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (1)ーオリエンテーションに対する態度の基礎データー, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 59-71.
- 14) 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (2)ーpersonalityとの関連からー, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 73-82.
- 15) 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2004). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (3)ー出身校, 居住形態との関連からー, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 3, 57-68.
- 16) 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2005). オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 4, 75-86.
- 17) 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2007). 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 6, 45-54.
- 18) 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2008). 新入生オリエンテーションにおける獲得感と大学生活満足感との関連性について (2)ー複数学科のデータに基づく分析ー, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 7, 47-56.
- 19) 樋口耕一 (2003). テキスト型データの計量的分析ー2つのアプローチの峻別と統合ー, 理論と方法, 19, 101-115.
- 20) 樋口耕一 (2001). KH Coder Index Page. <http://khc.sourceforge.net/> (2011年10月17日)
- 21) House, J. D. & Kuchynka, S. D. (1997). The effects of a freshman orientation on the achievements of health science students. *Journal of college student development*, 38, 540-541.
- 22) 古田雅明・中村紘子・香月菜々子・加藤美智子・田中優・西河正行・福島哲夫・堀洋元・向井敦子・八城薫 (2012). 新入生オリエンテーションに対する学生による評価の分析, 日本心理学会第76回大会発表論文集, 1135.

付録1 2009～2011年度 新入生オリエンテーションスケジュール

日時	スケジュール
2009年度	
2009年4月6日	
9:30	学生 大学集合：注意事項のアナウンス
10:00	バスに移動・出発
13:00	清里 清泉寮到着 バスの車内にて学生同士の自己紹介
13:10	昼食
14:30	大学生活の案内
14:35	教職員自己紹介
15:10	カリキュラム全般ガイダンス
16:25	大学院生による学生生活・進路についての説明
18:00	夕食
19:30	レクリエーション：自己紹介ゲーム
20:10	温泉入浴時間
22:20	点呼
22:30	学生就寝
2009年4月7日	
7:30	起床
8:30	朝食
9:30	記念写真撮影
9:45	バスに集合・出発
10:10	天候が良かったので、行き先変更し清里美し森で自由散策
11:00	バスに集合・出発
11:45	八ヶ岳リゾートアウトレット到着 自由時間
13:15	バスに集合・出発
16:00	大妻女子大学到着 解散
2010年度	
2010年4月7日	
9:30	学生 大学集合：注意事項のアナウンス
9:45	バスに移動・出発 バスの車内でDVD鑑賞 ポール・ラッシュの生涯(97分)
13:00	清里 清泉寮到着
13:10	コテージに移動・昼食 教員・院生は学生と一緒に食事をする
14:30	ガイダンス
14:30	参加スタッフの紹介（教員・助手・院生）
15:15	大学院生による学生生活・進路についての説明
16:00	レクリエーション① グループワーク（お互いに知り合うことが目的）
17:30	夕食
18:30	入浴、自由時間、談話コーナー開催時間
21:30	点呼
22:00	就寝
2010年4月8日	
7:30	起床
8:00	朝食
9:15	レクリエーション② オリエンテーリング
	記念写真撮影
11:30	昼食、自由時間
13:00	バスに集合・出発
16:00	大妻女子大学到着 解散
2011年度	
2011年4月7日	
10:00	学生 大学集合 諸連絡（ex. 履修について）
10:45	教職員自己紹介
11:15	大学院生による学生生活の紹介（一人3～5分）
11:30	レクリエーション ①班分けゲーム ②自己紹介ゲーム
12:15	昼食 班ごとに昼食（教員・院生も学生と一緒に昼食をとる）
13:00	学内オリエンテーリング
14:50	オリエンテーリングの順位発表・諸連絡・記念写真撮影
15:00	解散

座学中心のプログラムで
教務ガイダンスの説明が中心

学生同士の自発的な交流に
まかせ、自由時間を多く設
定している

最初の出会いで緊張して
いる段階は、負担の少な
いプログラムを提供

学生同士が知り合う最初の
機会に教員が関与

自由時間をうまく使えない学
生のために、教員が個別相
談に乗ったり、グループで話
しをしたりする談話コーナ
ーを設置

全教員がオリエンテーリングのポイ
ントを担当し、常に教員と学生が交
流できるように配慮